Full paper

理由を表さない日本語のカラ節の理解

斉藤信浩（九州大学）
玉岡賀津雄（名古屋大学）

要　旨

理由節カラは、内容領域、認識領域、言語行為領域へと意味的に拡張し、多義化した。韓国語は日本語と同じ3領域に拡張した理由節を持ち、中国語は内容領域と認識領域の2領域だけを持つ。そこで、韓国語および中国語を母語とする日本語学習者の文法力を同等に統制して、3領域の用法の習得を比較した。その結果、韓国語母語話者は3領域を等しく理解したが、中国語母語話者は言語行為領域の理解が著しく低かった。母語の理由節の特性が外国語の理解に強く影響することが示された。

1.　はじめに

日本語の初級の必修項目として理由節[1]のカラがあり、全ての初級教科書で理由節のカラが導入されている。カラの説明としては、原因や理由を表す表現として、例えば、『げんきI』の7課では「みちこ：あっ、猫がいますね。でも太っていますね。Oh, there is a cat. But he is a little fat.」「ロバート：ええ、よく食べますから。Yes, because he eats a lot.」、10課では「たけし：どこにも行きません。お金がないから、ここにいます。I won’ t go anywhere. I don’ t have money, so I will stay here.」のように提示されて英訳されており、同様に他の多くの教科書でも理由節のカラの説明としては、*because*、*since*、*so* などで訳出されるような、前件と後件が因果関係で結ばれている文で導入されている。しかし、同一の教科書内で次のようなカラも見られる。

(1) 大家　　：それから、かぎを新しくしましたから、どうぞ。
Oh, I changed the lock. Here’s the key.
（『げんきII』Lesson 21 Dialogue Burglar p. 209）

(2) ロバート：始めましょうか。
みちこ　　：あっ、まだ飲まないでください。メアリーさんも来ると言っていましたから。
Don’ t drink yet. Mary said that she would come.
（『げんきI』Lesson 8 Dialogue Barbecue p.186）

(3) 母　　：ゆみ、勉強しなさい。来週は期末試験があるのに、ぜんぜん勉強していないでしょ。

[1]「理由節」という総称的な用語を用いたのは「前件と後件で因果関係を表す文」のことを示すためである。2章でも示す通り、この議論は逐語訳の議論ではない。英語話者が *because* を「カラ」と訳し、*since* を「ノデ」と訳すという対応関係がないように、韓国語の-(*u*)*nikka* も中国語の「因为」もその言語での「理由の標識」であり、日本語の「カラ」に逐語訳されるものではない。本稿でいう「理由節」とは、英語では *because*、*since*、*so* など、韓国語では-(*u*)*nikka*、-(*u*)*muro*、*-ki ttaemune*、*V-ase/-ese*、*N-iese/ilase* など、それぞれの言語が持つ「理由の標識」の総称である。

ゆみ　：お母さん、私、もう17なんだから、少しほっておいてよ。
Mom, I am 17 years old. Leave me alone.
母　：今、がんばっておけば、いい大学に入れて、後で楽になるんだから。
If do your best now, you will be able to enter a good university, you will be easier later.
（『げんき II』Lesson 22 Dialogue Education in Japan p.230）

例(1)でのカラは「かぎを新しくした」という理由で「どうぞ（お使いください）」という意味関係ではない。「どうぞ」という行為を相手に勧めるための前提が従属節で示されている。英語訳でも、*because* などの理由の接続詞が使われていない。同様に、例(2)も「メアリーさんが来ると言っていた」という理由で「飲まないでください」という因果関係ではなく、相手に「飲まないで」という行為を示すための前提を提示しているだけである。やはり、理由の接続詞は使われていない。例(3)も「17歳だ」という理由で「ほっておいて」という結果を示す因果関係にはなっていない。英訳でも「Here's the key because I changed the lock.」「Don' t drink yet because Mary said that she would come.」「Leave me alone because I am 17 years old.」という *because* を入れた説明はされていない。このような *because* に翻訳できないようなカラは、教科書に掲載された対話文では、数多く見つけることができる。

(4) 高橋　：あっ、渡辺さん、ちょっと待って。僕も帰りますから…。
渡辺　：すみません、ちょっと急ぎますから。
（『みんなの日本語 II』Lesson 47 p.179）

(5) 山下　：絵はがきを見ながら話せば、楽しいと思いますよ。
アリス　：ああ、そうですね。絵はがきならありますから、持って行き ます。
（『A Course in Modern Japanese vol.2』Lesson 11 p.3）

ここでも例(4)の「僕が帰る」という理由で「渡辺さんちょっと待ってください」という結果を表す因果関係にはなっておらず、また例(5)の「絵はがきがある」という理由のために「持って行きます」という行為を行う因果関係にはなっていない。

日本語の理由節のカラは多義であり、前件と後件が［原因–結果］という具体的な内容を表す内容領域の関係から、［根拠–推論］という抽象的な認識上の関係を表す認識領域へと拡張し、この認識的な関係は、［前提–帰結］という対話者間の機能的な役割を持つ言語行為領域の意味関係へと拡張しているといわれている（Alfonso, 1974; 白川，1991, 1994; ヤコブセン，1990）。上述のカラは［前提–帰結］の用法であり、後件の行為を促すための前提を提示する用法であるが、初級から中級段階においては、日本語教育の指導項目として取り挙げられることはあまりない[2]。本稿では、中国

[2] 日本語の教科書で必ずしも説明されていないわけではなく、拡張した特別な用法として、脚注や付属解説書などで説明されることもある。『みんなの日本語初級 I　第2版翻訳・文法解説英語版』では、“A statement before “から” gives the reason for a statement after it. (p. 63)” という説明があり、『初級日本語げんき I　第2版』では、“The long form before から is more polite, and is frequently found in request and suggestion sentences.「かぶきの切符がありますから、一緒に観に行きましょう。」(p. 216)” のような説明が見られる。

語母語話者と韓国語母語話者の比較を通して、理由節のカラの多義がどのように理解されているかを調査する。

2.　理由節が表す領域と言語間の違い

Sweetser（1990: 78 日本語訳は、澤田，2000）は、理由節を 3 つの領域に区別している。

（i）内容領域（content domain）
　Since John wasn’ t there, we decided to leave a note for him.
（ii）認識領域（epistemic domain）
　Since John isn’ t here, he has（evidently）gone home.
（iii）言語行為領域（speech-act domain）
　Since you’ re so smart, when was George Washington born ?

(i)の内容領域の例文では、従属節の「Since John wasn’ t there（ジョンがそこにいなかったから）」という ‘因’ に対して、主節の「we decided to leave a note for him（メモを残しておくことにした）」という ‘果’ があり、従属節と主節が明確な因果関係で結ばれている。このように因果関係が意味的に明瞭な場合を内容領域と呼ぶ。(ii) の認識領域の例文は、従属節の「Since John isn’ t here（ジョンはここにいないから）」に対して、主節の「he has（evidently）gone home（家に帰ってしまったんだろう）」で、従属節の内容の結果を表しているのではなく、従属節の事態を基にした判断の結果を主節で表現しており、これは認識領域と呼ばれる。(iii) の言語行為領域は、「Since you’ re so smart,（あなたは頭がいいから、）」という従属節があり、ちょっと聞くんだけど、という前提の基に、「when was George Washington born ?（ジョージ・ワシントンはいつ生まれたの）」という質問の言語行為を導いているだけであり、もはや従属節と主節の間には因果関係と言えるような緊密な意味関係はない。

Sweetser（1990）と並行して、ヤコブセン（1990）が日本語の複文の言語構造に関する分析を行っている。ヤコブセン（1990）では、カラによって導かれる理由節の意味関係は、［原因–結果］という具体的な内容を持つ現象的関係から、［根拠–推論］という抽象的な認識上の関係に展開し、最終的には［前提–帰結］という機能的な役割を持つ意味関係に発展しているとし、日本語の理由節も英語と同様の意味拡張があるとしている。ヤコブセン（1990）の［原因–結果］は、Sweetser（1990）の内容領域、［根拠–推論］は認識領域、［前提–帰結］は言語行為領域にそれぞれ対応していると言えよう。

日本語の理由節は接続助詞カラ、ノデ、タメなどで構成される。従来の意味分析では、これらの明確な意味の差はなく、「だ／でしょう／だろう／まい」などの接続形式と、文体・待遇表現上の違いがあるだけだと言われている（今尾，1990; 趙，1988; 永野，1988; 田中，1995）。そのため、本稿では例示や議論の簡潔化のために理由節を「カラ」に代表させる。中国語では関連詞の因为が[3]、

[3] 中国語の従属複文（偏正複句）は関連詞がない場合は、解釈に関わる手掛かりとして、従属節の主語や主題の有無、時間副詞、代詞などを決め手として前件と後件の因果関係を決定づけている（相原，1981; 大河内，1967; 下地，2006）。例えば、以下(a)の文では 3 人称の「他」で因果関係が解釈される。(b)の文では、人称がないため、一般論として捉えられ、条件の解釈になっている（下地，2006: 75）。
(a)他多读书　多懂道理 .（彼はたくさん本を読んだので、よく物事を知っている。）
(b)多读书　多懂道理 .（たくさん本を読めば、道理に詳しくなる。）

韓国語では、接続語尾[4]（連結語尾）の-(*u*)*nikka*（Yale 式で表記）や名詞形語尾の-(*u*)*muro* や-*ki ttay-muney* や連結語尾 *V-ase/-ese*, *N-iese/ilase* という標識が理由節の表現である（梅田・村崎，1981; 菅野，1981b; 任瑚彬・洪璟杓・張淑仁，1989）。

しかし、すべての言語が「理由節の標識」で「内容領域」「認識領域」「言語行為領域」の3 領域に拡張した多義構造を表せるわけではない。以下、(6)から(9)は内容領域の意味関係を表す日本語、英語、中国語、韓国語の文であり、(10) から(13) は認識領域の意味関係を表す文である[5]。

(i) 内容領域（content domain）—［原因–結果］
(6)　雨が降ったから，川の水が溢れている。
(7)　Because it rained, the river is overflowing with water.
(8)　因为下雨了，所以河里的水正溢出来 .
(9)　*pika naylyeso kang mwuli hulle nemchiko issta.*

(ii) 認識領域（epistemic domain）—［判断–推論］
(10)　ここにカバンがあるから，まだ社内にいるだろう。
(11)　He should still be in the office, because his bag is（still）here.
(12)　因为这里有公文包，所以他还在公司内 .
(13)　*yekiey kapangi issunikka acik hoysa aney issul kesita.*

これらの内容領域と認識領域は、多くの言語で類似の理由節の標識で示されており、基本的な用法であると言えよう。ところが、(16) から(17) のような言語行為領域では、言語間に違いが見られる。言語行為領域の用法は、英語では理由節による使用が困難であり、中国語では不可能である。しかし、日本語と韓国語では、この理由節の用法において3 領域に拡張した用法を有している（Kim K.-H. & Suh K.-H., 1994）。

(iii) 言語行為領域（speech-act domain）—［前提–帰結］
(14)　そこに醤油があるから，自由に使ってください。
(15) *Because there is a soy sauce, please use it freely.
(16) * 因为那边有醤料，所以请自由取用 .
(17)　*kekiey sosuka issunikka maumkkes ssuseyyo.*

(14) の日本語の従属節の「そこにソースがある」という表現自体は理由を示すものではなく、主節の「自由に使ってください」の前提を示しているに過ぎない。そのため、因果関係が成立しているわけではない。英語では(15) のように *because* にすると非文になってしまう。Can you see that soy sauce ? あるいは A soy sauce is on the table. のように主節の行為を可能にする情報を提示してから、Please use it. や Take it. のように繋げるのが一般的である。(16) の中国語でも同様の理由で非

[4] 連結語尾（conjunctive ending）や活用語尾ともいう（任瑚彬・洪璟杓・張淑仁，1989）。
[5] (6)から(17) の英語、中国語、韓国語の対訳は、各母語話者にチェックを依頼した。ただし、日本語に対応させた翻訳であるため、やや不自然な表現になることを断っておきたい。あくまで、理由の標識で表現が可能な領域であるのか否かを示しているだけである。

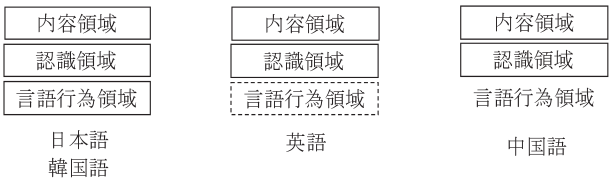

図1.　理由節が表せる領域の言語間の違い
注：実線の四角で囲まれた領域は表現可能、点線の四角は曖昧、何もないのは表現不可

文になる。中国語では、「那边有酱料．请自由取用.」のように表現し、英語と同様に単文を提示して後続文の言語行為を指示するのが一般的である。一方、韓国語では、この意味関係を(17)のように、-(*u*)*nikka* のような理由節の標識で表現することが可能になってくる[6]。つまり、日本語と韓国語では理由節の標識で言語行為領域を表すことができるので、3 領域を共有する。英語の場合は、*because* は内容領域での解釈が強く、言語行為領域の解釈は弱い。しかし、*since* を使うと、逆に認識領域や言語行為領域の解釈が強くなる傾向がある（Sweetser, 1990）。そのため、英語では、3 領域の間の使い分けを *because* と *since* の2 つの異なる標識で区別していると考えられる。日本語や韓国語と比べて、Sweetser（1990）は、英語は意味領域の分化が曖昧で未分化な部分が残っていると述べている。一方、中国語は言語行為領域を理由節の標識では表すことができない。結果として、4 言語の理由節の意味拡張領域は図1 のように示すことができる。

図1 に描いたように、言語間で理由節が表せる領域が異なっている。この違いは、明示的な知識ではないので、日本語を外国語として学習する条件では、気づきにくい文法項目である。そのため、韓国語母語話者であれば、日韓両言語で内容領域、認識領域、言語行為領域の3 領域を共有しているので、日本語の理由節カラの理解はすべての領域で容易であると予測される。一方、中国語母語話者であれば、日中両言語で内容領域と認識領域の2 領域を共有しているものの、言語行為領域は中国語に存在していないため、この領域の表現は理解が難しいと予測される。日本語の3 領域に対して、中国語と韓国語が好対称を成しているため、中国語母語話者と韓国語母語話者の文法力を同じレベルに統制し、図1 の領域間の違いが理由節カラの理解に影響するかどうかを検証した。

3.　方法

3.1.　調査対象

中国語を母語とする日本語学習者は、中国の西安市の3 つの大学で、87 名（男性33 名、女性54 名；平均は20 歳1 カ月、標準偏差は1 歳1 カ月）を対象に、韓国語を母語とする日本語学習者は、韓国の慶尚南道の1 つの大学で、56 名（男性9 名、女性47 名；平均年齢は21 歳6 カ月、標準偏差は2 歳1 カ月）を対象に、文法テストおよび理由節カラの理解テストを実施した（詳細は3.2 以下を参照）。調査は、中国では2011 年11 月に、韓国では2012 年6 月に、現地の教員の協力を得て実施

[6] –(*u*)*muro* は書き言葉であり、会話ではほとんど使用されないため、話し手が聞き手への行為を促す言語行為領域への意味拡張との関連性は見られない。また、-*ki ttaymuney* は幅広く用いられる原因・理由の表現だが、主節に命令・勧誘・依頼など、対話者へ働きかける表現が来ないという制約があるため（Kim, K.-H. & Suh, K.-H., 1994; Sohn, S.-O., 2006）、意味拡張に制約があると述べられている。そのため、韓国語の拡張的な理由節は-(*u*)*nikka* に代表されると言ってよいだろう。

した。当該の大学の教室を利用し、試験監督のもと、複数回にわたってテストを行った。辞書等の使用は認めなかった。中国語母語話者の日本語学習歴は、1 年1 カ月（標準偏差は2 カ月）、韓国語母語話者の日本語学習歴は1 年4 カ月（標準偏差は7 カ月）であった。

3.2.　中国語母語話者と韓国語母語話者の日本語文法力の統制

日本語の理由節カラの理解に及ぼす中国語と韓国語の母語の影響の違いを考察するにあたり、両群の日本語能力を統制しなくてはならない。そのために、宮岡・玉岡・酒井（2014）が開発した文法テストを使って文法力が同じになるように統制した。このテストは、形態素変化（morphological inflections）が12 問、局所依存（local dependency）が12 問、構造の複雑性（complex structure）が12 問、の3 つの下位範疇からなる。形態素変化は活用のことであり、「誤って花びんを壊した私を、父は(　)。」に対して「責めないだった」「責めるなかった」「責めなかった」「責めなくてだった」のような四択が用意されており、適切な語を選んで括弧に入れるものである。この場合は「責めなかった」が正解となる。局所依存は文内で隣り合う2 つの単語を正しく結び付けられるかどうかを問う問題で、形容詞や助詞や自他動詞などがこれにあたる。「私は(　)人が好きだ。」に対して「やさしい」「やさしいの」「やさしく」「やさしくて」のような四択が用意されている。この場合は、「やさしい」が正解である。構造の複雑性は、局所依存のように2 つの要素が隣接するのではなく、一文の離れたところに位置している場合に全体的な文構造を正しく構築できるかどうかを問う問題で、「今朝はまだ朝ごはんを(　)。」に対して、「まだ」を受けて「食べていない」「食べる」「食べなくて」「食べた」の四択から正しい回答を選ぶものである。この場合は、否定形の「食べていない」が正解である。文法項目は旧日本語能力試験（2007）の配当級に従って、4 級から1 級までが均等に配列されている。本研究の両言語の母語話者96 名について、クロンバックのα係数で36 問の文法テストの信頼性を検討した結果、$\alpha = .86$ で、非常に高い信頼性を示した。

3.3.　中国語母語話者と韓国語母語話者のペアーマッチ・サンプリング

中国語母語話者87 名と韓国語母語話者56 名をプールとして、ペアーマッチ・サンプリング（pair-matched sampling）の手法で、文法テストの得点を基にして、中国語母語話者と韓国語母語話者の48 ペアー（合計は96 名）を作り、文法力が同じになるように統制した。その結果、韓国語母語話者の文法テストの平均は26.67 点（標準偏差は5.79 点）、中国語母語話者の平均は26.60 点（標準偏差は5.50 点）で、ほぼ同じ得点になった。念のために、両群の文法テストの得点を独立したサンプルの t 検定（IMB SPSS Statistics 22.0 を使用）で比較すると、ほぼ違いがないことが示された［$t(94) = 0.05$, $p = .96$, ns］。したがって、中国語母語話者と韓国語母語話者の両群の日本語の文法力が同じレベルに統制された。これで本研究の目的である理由節カラの理解を異なる母語群で直接に比較検討することができる。

得点26 点で統制した両群は、文法テスト36 点満点の得点率で73.8% にあたる。これは、旧日本語能力試験に準拠した文法テストの73.8% は2 級から1 級の間くらいの日本語文法力に相当すると考えられる。

3.4.　理由節カラの理解の測定

理由節カラの理解テストは、前件と後件で確定的な因果関係を表す内容領域に該当する「理由のカラ」10 問、認識領域に該当する「判断のカラ」10 問、言語行為領域に該当する「前提のカラ」10

問，合計30問で構成した。

理由のカラの設問は、「もう(　)、休みたいです。」に対して、「疲れたから」「疲れたなら」「疲れたとき」「疲れたのに」の中から括弧に入る適切な選択肢である「疲れたから」を選ぶ。判断のカラの設問は「今日は日曜日(　)、田中さんは家にいるだろう。」に対して、「だから」「だと」「でも」「なのに」の中から適切な「だから」を選択する。前提のカラの設問は「遅いよー、私、先に(　)、後から来てね。」に対して、「行くから」「行くなら」「行っても」「行くのに」の中から適切な解答となる「行くから」を選択するものである。文脈情報は考慮せず、一文の中の前件と後件の関係からのみ判断し、適切な解答を選択する。理由のカラは、玉岡（2006）では、新潮文庫100冊で特定の「何しろ」「何せ」「せっかく」「現に」「どうせ」「実際」「本当に」の副詞と共起する条件で、カラの出現は文中477回（68.44%）で文末220回（31.56%）となり、文末でもある程度使われていることが指摘されている。しかし、白川(1991, 1995）は、カラの文末での用法は、終助詞的な用法となっていると指摘している。そのため、本テストではカラが文末に来るテスト項目は含まなかった。

問題文の語彙の難易度を、『日本語読解学習支援システム—リーディング チュウ太』(川村・北村・保原；http://language.tiu.ac.jp/）で確認した。理由のカラの設問群の語彙総数は115語で、N5が100語（87.0%）、N4が8語（7.0%）、N2N3が5語（4.3%）、N1が0語，級外2語（1.7%）であった。判断のカラの設問群は語彙総数124語で、N5が102語（82.3%）、N4が11語（8.9%）、N2N3が7語（5.6%）、N1 が1語（0.8%）、級外が3語（2.4%）であった。前提のカラの設問群の語彙総数は101語で、N5が79語（78.2%）、N4が7語（6.9%）、N2N3が12語（11.9%）、N1が1語（1.0%）、級外が2語（2.0%）であった。この結果、3領域の提示文の全てにおいて、N5が約80%を占めており、N1および級外は3%以下に統制されている。したがって、3領域の各10問の提示文の表現の難易度は、本被験者に困難なく理解できると想定される。

研究の対象となるテスト問題は、理由節カラ30問と文法テスト36問であるが、理由節カラの調査であるということを分からないようにするために、他の様々な錯乱のための問題を87問含んで、合計153問とした。それらの問題をランダムに配列して、全体のテストを作成した。このテストを、休憩時間を含めて2時間で実施した。辞書等の使用は認めていない。本被験者は、2時間以内でテストを終了した。クロンバックのα係数による信頼性の検定の結果、理由節の理解テストは$\alpha=.90$であり、非常に高い信頼性を示した。

4.　調査結果

4.1.　韓国語母語話者と中国語母語話者の各問題項目の結果

韓国語母語話者48名と中国語母語話者48名の各問題と正答者数を表1に示した。全体の得点の議論は次節で行い。本節は特徴的な項目のみ記述する。

理由のカラの問題3は、中国語母語話者の正答者数も26名（56.52%）でやや少ないが、韓国語母語話者の正答者数は7名（14.58%）とさらに少なかった。これは前件に否定文があり、後件にも否定文があり、なおかつ「よっぱらっていない」のようにアスペクトを否定した形式であったため、両言語の母語話者とも、混乱したのではないかと推測される。特に韓国語では「よっぱらう」は日本語のようなアスペクトの「ている」で表現されることがあまりなく、結果の状態を表す際に、一般的に韓国語ではアスペクト形式を用いない。「よっぱらっている」は *chwiha<u>koissta</u>* のようなアスペクトの*-ko issta* を用いずに、過去形で *chwihayssta* のように過去形*-hayssta* で表現するため、より混乱を起こしやすかったと思われる。

表1.　韓国語母語話者と中国語母語話者の各問題項目の得点比較

		刺激文	正答者数 韓国語母語話者	正答者数 中国語母語話者
理由	1	すみません、おなかが痛いから、病院へ行きます。	43	44
	2	がんばって勉強したから、もう漢字も書くことができます。	36	34
	3	お酒を飲まなかったから、よっぱらっていない。	7	26
	4	足が痛かったから、そんなに遠くまで歩かなかった。	37	36
	5	もう疲れたから、休みたいです。	40	42
	6	彼は子供のころ足をケガしたから、今はあまり走れないらしい。	34	35
	7	留学に行きたいから、パスポートを準備します。	20	30
	8	あの子は勉強していないから、いつもテストの点がよくない。	32	39
	9	テストが難しかったから、学生達は大変だった。	35	32
	10	あの人はもう引越ししたから、手紙はとどかないでしょう。	30	27
判断	11	カバンがあるから、まだ校内にいる。	28	19
	12	昨日はデパートが休みだったから、きっと今日はデパートは混んでいるよ。	45	42
	13	指輪をしていたから、彼は既婚者だよ。	11	33
	14	今日は日曜日だから、田中さんは家にいるだろう。	4	42
	15	むずかしくなさそうだから、私がやってみます。	38	41
	16	ずっと座っていたから、疲れたんじゃありませんか。	40	37
	17	あの人はハンサムだから、人気がありそうです。	32	20
	18	だんだん空が暗くなって来たから、雨が降るでしょう。	34	30
	19	高校3年生だから、18歳でしょう。	31	26
	20	明日、彼は学校に来るようだから、病気はだいじょうぶだったようだ。	24	16
前提	21	遅いよー、先に行くから、後から来てね。	24	11
	22	頼むから、千円貸してくれよ。	22	20
	23	そこにあるから、自由に使ってください。	25	5
	24	わかったから、もう言わないで。	27	23
	25	書斎に辞書があるから、取って来ましょう。	30	16
	26	説明書が入っているから、確認して。	40	23
	27	むかえに行くから、いっしょにレストランへ行こう。	25	15
	28	戸棚に入っているようだから、使ってね。	36	9
	29	学校のプリンターはロッカーに入っているから、自由に使って。	32	13
	30	近くに温泉があるらしいから、行ってみよう。	36	18

判断のカラは、問題13と14で、度数に大きな差が見られた。問題13は中国語母語話者（33名、68.75%）よりも韓国語母語話者（11名、22.92%）の正答者数が少なかった。問題13は「指輪」「既婚者」という漢字語彙の助けによって、中国語母語話者の正答者数が多くなり、韓国語母語話者は逆に低くなったのだろうと思われる。問題14も中国語母語話者（42名、87.50%）に対して、韓国語母語話者（4名、8.33%）の正答者数はきわめて少なかった。韓国語では「今日は日曜日だから、田中さんは家にいるだろう（*onulun ilyoil<u>ila</u> tanakhassinun cipey issul kesita.*）」のように、「であり」に類似した-(*i*)*la* のような表現が用いられ、理由節で表現しないため、これによる混乱で得点が著しく

下がっているものと思われる。理由の韓国語母語話者の得点が6.89 点（SD＝1.67）に対し、中国語母語話者は7.51 点（SD＝1.77）、判断の韓国語母語話者の得点が6.11 点（SD＝1.68）に対し、中国語母語話者は6.72 点（SD＝1.49）で、共に韓国語母語話者のほうが得点が低かったのは、この問題13 と問題14 が平均点を若干押し下げたのだと思われる。しかし、次節で見るように、項目としては両母語話者間で有意な差が見られなかったため、理由と判断の2 つの用法については、全体として、同じ得点水準であったとみなすことができる。

一方、前提のカラは、中国語母語話者は全ての項目で韓国語母語話者よりも正答者数が少なかった。特に、問題23（韓国語母語話者25 名で52.08%、中国語母語話者5 名で10.42%）、問題28（韓国語母語話者36 名で75.00%、中国語母語話者9 名で18.75%）、問題29（韓国語母語話者32 名で66.67%、中国語母語話者13 名で27.08%）の後続文の「使う」で、相手に使用を促す表現において中国語母語話者の正答者数が少なかった。中国語では、単文で前提条件を示し、後続文で相手の行為を促す表現が多く使用されるので、日本語のカラを用いて前提条件を示すことが想定され難かったために、正答者が少なかったのではないかと思われる。

4.2.　母語と3 領域のカラの比較

被験者96 名の3 領域の得点について、2（母語：韓国語・中国語）×3（3 領域：理由・判断・前提）の二元配置の分散分析を行った。その結果、母語の主効果が有意であった［$F(1, 282)=7.95$, $p<.01$, $\eta_p^2=.03$］。また、3 領域の主効果も有意であった。［$F(2, 282)=30.82$, $p<.001$, $\eta_p^2=.18$］。さらに、母語と3 領域の交互作用も有意であった［$F(2, 282)=25.80$, $p<.001$, $\eta_p^2=.16$］。交互作用が有意であったので、母語別に3 領域の主効果と領域間の違いを検討することにした（平均と標準偏差は表2 を参照）。

母語内での各項目の得点を検証するために、3 領域について一元配置の分散分析を行ったが、韓国語母語話者は、主効果が有意ではなかった［$F(2, 141)=0.92$, $p=.402$, $\eta_p^2=.01$］。したがって、理由、判断、前提のカラはすべて同じように理解されたことが分かる（理由＝判断＝前提）。一方、中国語母語話者は、3 領域について一元配置の分散分析で、主効果が有意であった［$F(2, 141)=61.51$, $p<.001$, $\eta_p^2=.47$］。そこで、シェフェの多重比較を行った。その結果、前提のカラだけが理由および判断のカラよりも有意に得点が低かった（理由＝判断＞前提）。

母語間での3 領域ごとの違いを一元配置の分散分析で検討した。理由のカラについては、母語について有意な違いはなかった［$F(1, 94)=2.73$, $p=.102$, $\eta_p^2=.03$］（韓国＝中国）。判断のカラについても、母語に有意な違いはなかった［$F(1, 94)=1.27$, $p=.263$, $\eta_p^2=.01$］（韓国＝中国）。前提のカラ

表2.　韓国語母語話者と中国語母語話者のカラの3 領域の得点比較

母語		カラの3 領域			シェフェの多重比較
		理由	判断	前提	
韓国語母語話者	*M*	6.89	6.11	6.53	理由＝判断＝前提
	SD	1.67	1.68	2.24	
中国語母語話者	*M*	7.51	6.72	3.96	理由＝判断＞前提
	SD	1.77	1.49	2.24	
比較結果		韓国＝中国	韓国＝中国	韓国＞中国	

注：*M* は平均、*SD* は標準偏差を示す。＝は得点がほぼ同じ、＞は有意な違いを示す

については、母語に有意な違いがみられた［$F(1, 94)=43.70$, $p<.001$, $\eta_p^2=.32$］（韓国>中国）。つまり、韓国語と中国語の母語の違いは、前提のカラの理解において顕著であった。

5. 考察

本稿では、まず、Sweetser（1990）が提唱した意味拡張による従属節の多義構造に着目し、言語間の差を記述した。そして、母語にない文法項目で、かつ、外国語として日本語を学習する上で、暗示的な知識である従属節の多義性がどのように影響するかを検証した。

日本語と韓国語の理由節は、内容領域（理由のカラ）、認識領域（判断のカラ）、言語行為領域（前提のカラ）の3領域に拡張した意味を有している。一方、中国語の理由節は、内容領域と認識領域の用法を持つものの、言語行為領域に拡張した意味は有していない。そのため、韓国語と中国語は言語行為領域の有無について好対称をなしており（図1を参照）、3領域を有する日本語を学習する上で、母語の影響を比較するのに適していた。本研究では、中国語母語話者と韓国語母語話者の日本語能力を統制するために、ペアーマッチ・サンプリングの手法で、文法テストの得点が類似した被験者を48ペアー（96名）作り、日本語の文法力を同等レベルに統制して、理由節カラの理解を比較した。

理由節カラの理解を分析した結果、中国語と韓国語の2つの母語話者間でみた場合、内容領域（理由のカラ）と認識領域（判断のカラ）では両言語の母語話者の得点に違いはなく、これらの用法については同じように高い理解度を示した。一方、拡張的な用法とされる言語行為領域（前提のカラ）については、両言語の母語話者の間で大きな得点の差があり、この領域では中国語母語話者（3.96点）は、韓国語母語話者（6.53点）の半分程度の得点に留まった。さらに、母語話者内で見た場合、韓国語母語話者がすべての領域で等しく高いレベルの理解であったのに対して、中国語母語話者は言語行為領域（前提のカラ）のみが他の2領域に比して著しく低い得点となっていた。

被験者の個別の傾向を見ると、韓国語母語話者のうち、全体の成績が最も低かった被験者は、理由のカラ1点、判断のカラ1点、前提のカラ1点であった。一方、全体の成績が最も高かった被験者は、理由のカラ9点，判断のカラ8点、前提のカラ10点であった。韓国語母語話者の場合、カラの3領域でどの領域の得点が高いか、低いかという差はなく、個々の被験者の傾向を観察しても3領域の得点傾向に大きな特徴が見られなかった。一方、中国語母語話者のうち、全体の成績が最も低かった被験者は、理由のカラ2点、判断のカラ4点、前提のカラ1点であった。一方、全体の成績が最も高かった被験者は、理由のカラ10点、判断のカラ10点、前提のカラ8点であった。中国語母語話者の場合、概して、前提のカラで得点が低い傾向が全体的に見られた。特に、特徴的だったのが、3名の被験者が前提のカラで0点であったことである。それでも、これらの被験者も他の項目では十分に得点できていたことを考えると（被験者3；理由9点、判断5点、前提0点、被験者22；理由6点、判断4点、前提0点、被験者48；理由7点、判断7点、前提0点）、中国語母語話者にとって、やはり、前提のカラの理解が困難だったことが伺える。

内容領域（理由のカラ）と認識領域（判断のカラ）の得点が韓国語母語話者と中国語母語話者の間で差がなかったことは、［原因–結果］や［根拠–判断］の意味関係が、多くの言語では理由節の基本的な表現であるということを示唆している。それが学習している目標言語でも理解しやすかったのだと考えられる。一方、言語行為領域（前提のカラ）の得点は、韓国語母語話者では他の領域と同等の得点を得ていたのに対して、中国語母語話者のみ著しく低かった。Sweetser（1990）が議論したように、この結果は［前提–帰結］の意味関係が拡張した用法であり、言語に特有の違いから生じ

うる理解の難しさを示唆しているのではないかと思われる。つまり、中国語には、言語行為領域の用法が存在しないので、中国語母語話者には理解し難かったと考えられる。本研究は、日本語教育の観点から見ると、日本語の理由節カラには多義用法が存在し、意味関係の拡張のない言語を母語とする日本語学習者には，理解が難しいことを明らかにした。

参照文献

相原茂 (1981). 森岡健二他(編)「中国語の複句」『講座日本語学11』東京：明治書院，pp. 240–258.

今尾ゆき子 (1990).『ノデ，カラ，タメ—その選択条件をめぐって—』名古屋大学文学研究科日本言語文化専攻修士論文.

任瑚彬・洪璟杓・張淑仁 (1989).『韓国語文法』ソウル：延世大学校出版部.

梅田博之・村崎恭子 (1981).「現代朝鮮語の文構造」『講座日本語学10』東京：明治書院，pp. 53–67.

大河内康憲 (1967).「複句における分句の連接関係」『中国語学』176: 104–105.（大河内康憲 (1997).『中国語の諸相』(再録) 東京：白帝社).

菅野裕臣 (1981a).「朝鮮語」『講座日本語学11』東京：明治書院，pp. 259–269.

菅野裕臣 (1981b).『朝鮮語の入門』東京：白水社.

国際交流基金・日本国際教育協会 (2007).『日本語能力試験出題基準【改訂版】(第4版)』東京：凡人社.

権在淑 (1992).「現代朝鮮語の用言の接続形—니까について」『Lingua』3: 37–59.

権在淑 (1994).「現代朝鮮語の III—서について」『朝鮮学報』152: 1–46.

下地早智子 (2006).「中国語の条件表現—条件文における “了” の分布と意味—」『条件表現の対照』東京：くろしお出版，pp. 83–98.

白川博之 (1991).「「カラ」で言いさす文」『広島大学教育学部紀要』39: 249–255.

白川博之 (1995).「理由を表さない「カラ」」『複文の研究(上)』東京：くろしお出版，pp. 189–219.

スリーエーネットワーク編 (2012).『みんなの日本語初級 I 第2版 本冊』東京：スリーエーネットワーク.

スリーエーネットワーク編 (2013).『みんなの日本語初級 II 第2版 本冊』東京：スリーエーネットワーク.

スリーエーネットワーク編 (2014).『みんなの日本語初級 I 第2版翻訳・文法解説英語版』東京：スリーエーネットワーク.

田中久美子 (1995).「依頼場面における理由提示形式—「から」の待遇上の制約—」『言語文化と日本語教育 水谷信子先生退官記念号』9: 123–133.

玉岡賀津雄 (2006).「「決定木」分析によるコーパス研究の可能性：副詞と共起する接続助詞「から」「ので」「のに」の文中・文末表現を例に」『自然言語処理』13(2): 169–179.

趙順文 (1988).「「から」と「ので」—永野説を解釈する—」『日本語学』7(7): 63–75.

永野賢 (1988).「再説・「から」と「ので」とはどう違うか—趙順文氏への反批判をふまえて—」『日本語学』12(7): 67–83.

名古屋大学日本語教育研究グループ編 (2002).『A Course in Modern Japanese revised edition vol.2』愛知：名古屋大学出版会.

西光義弘 (1981).「英語—複文の構成」『講座日本語学11』東京：明治書院 , pp. 221–239.

坂野永理他 (2011).『初級日本語げんき I　第2版』東京：The Japan Times.

坂野永理他 (2011).『初級日本語げんき II　第 2 版』東京：The Japan Times.
前田直子 (2009).『日本語の複文―条件文と原因・理由文の記述的研究―』東京：くろしお出版.
宮岡弥生・玉岡賀津雄・酒井弘 (2014).「日本語の文法能力テストの開発と信頼性：日本語学習者のデータによるテスト評価」『広島経済大学研究論集』36(4):33–46.
ヤコブセン , W. M. (1990).「条件文における「関連性」について」『日本語学』4(9): 93−108.
Alfonso, A. (1966). *Japanese Language Patterns.* Tokyo: Sophia University.
Higashiizumi, Y. (2006). From a subordinate clause to an independent clause. *A History of English because-clause and Japanese kara-clause*. 51−103.Tokyo: Hituzi Syobo.
Kim, K.-H. & Suh, K.-H. (1994). The discourse connective nikka in Korean conversation. In N. Akatsuka (Ed.), *Japanese/Korean Linguistics* 4 :113−124. Stanford, CA: CSLI.
Sohn. Sung-Ock (2006). On the Emergence of Intersubjectivity: An Analysis of the Sentence-final nikka in Korean. *Japanese/Korean Linguistics*.12: 52−63.Stanford, CA: CSLI.
Sweetser, E. (1990). *From etymology to pragmatics Metaphorical and cultural aspects of semantic structure*. London: Cambridge University Press.（澤田治美訳 2000『認知意味論の展開』東京：研究社出版.）

Comprehension of the Japanese Non-reason -*kara* Clause

Nobuhiro SAITO (Kyushu University)
Katsuo TAMAOKA (Nagoya University)

Abstract

The Japanese -*kara* clause semantically extends from content domain via the epistemic domain to the speech-act domain, resulting in a polysynaptic form. The Korean language also has these three domains whereas the Chinese language has the content and epistemic domains but lacks the speech-act domain. Accordingly, Chinese learners of Japanese might have deficits in acquisition of the speech-act domain. To show this, the present study compared the acquisition of 48 native Korean and 48 Chinese speakers learning Japanese (N = 96 in total) by controlling their grammatical ability. The results indicated that Koreans scored equally high across the three domains while Chinese scored high in both the content and the epistemic domains but low in the speech-act domain. Consequently, the absent of a target language feature in the first language strongly affects acquisition of the target language.